優秀賞〈高学年の部〉

自まんのしょく人じいちゃん

埼玉県　さいたま市立大牧小学校 四年
秋本 蒼空

ぼくのおじいちゃんは鉄工所を経営している。社員はおじいちゃんだけだ。昔はひいおじいちゃんとぼくのお父さんも一緒に働いていたが、ひいおじいちゃんは亡くなり、お父さんは違う会社にしゅうしょくした。おじいちゃんが一人で工場を守っている。工場はぼくの家のとなりにある。

おじいちゃんの朝は早い。6時になると工場の周りをそうじ。ぼくは、ほうきをはく音で目をさます。7時には、けんこうのためにさん歩。8時にはシッターがあき仕事が始まる。とっても元気なおじいちゃんだ。

今はぼくも学校があるので、おじいちゃんの仕事を見ることはへってしまったが小さいころはよく見ていた。

暑い中、火花をちらしてようせつをしたり大きな音を立てて、ハンマーで鉄をたたいているおじいちゃんのすがたはとてもかっこいい。ぼくには何なのかよく分からないが、ものすごい大きな鉄の作品を一人で作り上げる。ぼくのうちに遊びにきた友達は、大てい言う。

「すごい音。うるさいね。」

でもぼくはうまれた時からこの音の中で生活しているのでうるさいとは感じない。工場から鉄をたたく大きな音が聞こえると、今日もおじいちゃん、元気だな、と安心する。おじいちゃんが病気になり入院していたときは、静まりかえった工場がとてもさびしかった。

おじいちゃんは、ぼくが学校から帰ると、必ず工場から

「おかえり。」

と声をかけてくれる。ぼくが出かける時は、

「どこいくんだい、気をつけて。」

と言ってくれる。じゅくや習い事の送りむかえもしてくれる。ぼくの家のとなりには仕事をしているおじいちゃんがいつでもいる。ぼくやお姉ちゃんのことを気にして、毎日のように顔を出してくれる。だからお母さんが仕事でいなくてもさみしくない。

おじいちゃんはよっぱらうと、

「大きくなったらじじと鉄工所で働くか。」

とぼくに言う。ぼくは、

「えーやだー。」

と答えるけど、本当は少しなやんでいる。ぼくはおじいちゃんもおじいちゃんの工場も大すきだからなくなってほしくない。おじいちゃんはあと何年働けるか分からないとよく言うけれど、ぼくはまだまだおじいちゃんには、工場で仕事をしていてほしいと思っている。

いつも近くでぼくたちを見守ってくれているおじいちゃん、どうもありがとう。ぼくはまだしょう来の夢はきまっていないけど、ぼくのゆめが決まるまで、工場を守っていてね。